イ 母上廿一〇七
ロ 詩五十〇十九
ハ 詩五十七〇四、五十九〇七、六十四〇三
ニ 耶九〇四、五

ホ 箴二〇廿二
ヘ 伯廿二〇十九、詩卅七〇卅四、四十〇三、六十四〇九
ト 詩五十八〇十
チ 詩四十九〇六

リ 耶十一〇十六、何十四〇六
ヌ 詩五十四〇六

イ 詩十〇四、十四〇一
ロ 箴三〇十
ハ 詩卅三〇十三
ニ 代下十五〇二、十九〇三
ホ 耶四〇廿二
ヘ 利廿六〇十七、卅六、箴廿八〇一
ト 結六〇五

ときダビデがよみて伶長にうたむしめたる教訓のうた

一 猛者よおんぢ何かればあしき企圖をもて自らほこるや神のあはれみい恒にたえざるかり　二 おんぢの舌いあしきことをむかり利き剃刀のごとくいつもりをおこなふ　三 なんぢい善よりも惡をこのみ正義をいふよりも虛僞をいふをこのむ、セラ　四 たばかりの舌よなんぢいすべての物をくひほろぼす言をこのむ　五 されば神とこしへまでも汝をくだき、また汝をとらへてうの幕屋よりぬきいだし生るものゝ地よりなんぢの根をたやしたまむ、セラ　六 義者いこれを見ておそれ彼をわらひていむん　七 神をおのが力となさず、うの富のゆたかなるをたのみ、うの惡をもて己をかたくせんとする人をみよと　八 然いわれどわれい神の家にあるあをき橄欖の樹のごとし、我いいやとはあがに神のあはれみに依賴まん　九 なんぢこの事をおこなひ給ひしによりて我とこしへになんぢに感謝し、なんぢの聖徒のまへにて聖名をまちのぞまん、こい宜しきことなれば

第五十三篇　マハラッ（樂器の名あるひはいふ調べの名）にあはせて伶長にうたむしめたるダビデの教訓のうた

一 愚かなるものい心のうちに神なしといへり、かれらい腐れたりかれらい憎むべき不義をおこなへり善をおこなふ者なし　二 神い天より人の子をのぞみて悟るものと神をたづぬる者とありやなしやを見たまひしに　三 みな退ぞきてことゞく汚れたり善をおすものなし一人だにあなし　四 不義をおこなふものい知覺なきか、かれらい物くふごとくうじの民をくらひ、また神をよばふことをせざるなり　五 かれらい懼るべきことのなきときに大におそれたり、神いなんぢにむかひて營をつらぬるものゝ骨をちらしたまへばなり、神かれらを棄たまひしによりて汝かれらを耻かしめたり　六 願くいシオンよりイスラエルの救のいでんことを、神ろの民のとらへられたるを返したまふときヤコブいよろこびイスラエルい樂まん

第五十四篇　ジフ人のサウルにきたりてダビデいうれらの處にかくれをるにあらずやといひたりしときダビデうたのかみに琴にてうたむしめたる教訓のうた

一 神よねがむくい汝の名によりて我をすくひ、なんぢの力をもて我をさばきたまへ　二 神ようが祈をきゝたまへ、うが口のことばに耳をかたぶけたまへ　三 うい外人いうれにさからひて起りたち强暴人いわがたましひを索むるなり、かれらい神をおのゞ前におかざりき、セラ　四 みよ神いわれをたすくるものなり、主いわゞたましひを保つものとともに在せり　五 主いわゞ仇にろのあしきことの報をなしたまへん、願くいなんぢの眞實によりて彼等をほろぼしたまへ　六 我よろこびて祭物をおんぢに献ん、ヨホバよ我なんぢの名にむかひて感謝せん、こい宜しきことなればなり　七 ういヨホバいすべての患難より我をすくひたまへり、わが目いわが仇につきての願望をみたり

第五十五篇　ダビデうたのゝみに琴にてうたむしめたる教訓のうた

一 神よねがはくい耳をわが祈にかたぶけたまへ、わが懇求をさけて身をかくしたまふなかれ　二 われに聖意をとめ、我にこたへたまへ、うれ歎息によりてやすからず悲みうめくなり　三 これ仇のこゑと惡きものゝ暴虐とのゆゑなり、ういかれら不義をうれに負せ、いきどほりて我にふひせむるなり　四 うが心うがうちに憂ひいたみ死のもろ〳〵の恐懼うがうへにふきたり　五 ふるへと戰慄とうれにのゞみ甚だしき恐懼うれをおほへり　六 うれ云ねがはくい鴿のごとく羽翼のあらんことを、さらば我とびさりて平安をえん　七 みよ我

イ 詩卅八〇十四
ロ 詩百十八〇七
ハ 詩八十九〇四十九
ニ 詩五十二〇九
ホ 詩五十九〇十、九十二〇十一

チ 詩十四〇七

イ 詩卅八〇十四
ロ 母下十六〇七、八、十九〇十九
ハ 詩百十六〇三

はるかにのがれさりて野にすまん。セラ　八　ヱれ速かにのがれて暴風と狂風とをはなれん　九　ヱれ都のうちに
強暴とあらろひとをみたり。主よねがはくい彼等をほろぼしたまへ。かれらの舌をヱかれしめたまへ　十　彼
等ハひるもよるも石垣のうへをあるきて邑をめぐる。邑のうちにハ邪曲とわしき企圖とあり　十一　また悪き
こと邑のうちにあり。去へたげと欺詐とハろの街衢をさることなし　十二　われを誘れるものハ仇たりし
ものにあらず。もし然りしならバ倘去のばれしなるべし。我にむかひて己をたかくせし者ハわれを恨みた
りしものにあらず若去かりしならバ身をかくして彼をさけしなるべし　十三　されどれ汝なり。われとおな
じきものわが友われと親しきものなり　十四　われら互ひに去たしき語らひをなし。ふた會衆のあかゐ在てと
もに神の家にのぼりたりき　十五　死ハ忽然かれらにのゾみ。ろの生るまゝふて陰府にくだらんことを。ろハ悪
事ろの住處にありろの中にわれバなり　十六　されど我ハたゞ神をよばん。ヱホバわれを救ひたまふべし　十七　夕に
あしたゐ晝にわれなげき且かなしみうめかん。ヱホバわが聲をきゝたまふべし　十八　ヱホバハ我をせむる戰
鬪よりわが靈魂をあがおひいだして平安をえしめたまへり。ろハわれを攻るもの多かりけれバなり　十九　太
古よりいます者なる神ハヱが聲をきゝてかれらを懲めたまふべしセラ。かれらにハ變ることなく神をおろ
るゝことなし　二十　かの人ハおのれと睦みをりしものに手をのべてろの契約をけがしたり　二十一　ろの口ハあめら
かにして乳酥のおとくなれどもろの心ハたゞかひなり。ろの言ハあぶらに勝りてやゝ去らのなれどもぬき
たる劍にことならず　二十二　なんぢの荷をヱホバにゆだねよ。さらバ汝をさゝへたまはん。たゞしき人のうおか
さるゝことを常ゐゆるしたまふまじ　二十三　かくて神よなんぢハかれらを亡の坑におとしいれたまはん血をあ
がすものと詭計おほきものとハ生ておのが日の半ゐもいたらざるべし。然ハわれぞわれハ汝によりたの

ニ　耶六〇七
ホ　詩四十一〇九
ヘ　詩卅五〇廿六、卅八〇十六
ト　得下十五〇十三、十六〇廿三　詩四十一〇九　耶九〇四
チ　詩四十二〇二
リ　民十六〇卅
ヌ　但六〇十　路十八〇一　徒三〇一、十〇三、九、卅　提前五〇十七
ル　申卅三〇廿七
チ　詩七〇四
ワ　徒十二〇一
カ　詩廿八〇三、五十七〇四、六十二〇四、六十四〇三　箴五〇三、四、十、二〇十八
ヨ　詩卅七〇五　太十六〇廿五　路十二〇廿二　帰前五〇七
タ　詩卅七〇廿四
レ　詩五〇六
ソ　伯十五〇卅二　箴十〇廿七　傳七〇十七



まん

## 第五十六篇

ダビデのかテにてペリシテ人にとらへられしとき詠て「とほきところにを
る音をたてぬ鴿」の去らべにあむせて伶長にうたはしめたるミクタムの歌

一　あゝ神よねがむくい我をあむれみたまへ。人いきまきて我をのまんとし終日たゝかひて我を去へたぐ
二　わが仇ひねもす急喘てわれをのまんとす誇りたかぶりて我をたゝかふものおほし　三　われおうるゝときい
汝によりたのまん　四　われ神によりてろの聖言をほめまつらん。われ神に依賴みたれバおろるゝことあ
らじ肉體われになにをなし得んや　五　かれらい終日わがことばを曲るなり。ろの思念いことゞくわれに
ヱざむひをなす　六　かれらい群つどひて身をひろめ。ヱが歩に目をとめてヱが靈魂をうかゞひもとむ　七　か
れらい不義をもてのがれんとおもへり。神よねがむくい憤ほりてもろ〳〵の民をたふしたまへ　八　汝ヱ
があまたゝびの流離をかゾへたまへり。なんぢの革囊にヱが涙をたくむへたまへ。こい皆なんぢの冊にあ
るしあるにあらずや　九　わがよびもとむる日にいわが仇去りゾかん。われ神のわれを守りたまふことを知
る　十　われ神によりてろの聖言をほめまつらん我ヱホバによりてろのみことばを讃まつらん　十一　ヱれ神によ
りたのみたれバ懼るゝまとあらじ。人いヱれに何をなしえんや　十二　神よわがなんぢにたてし誓いわれをま
とへり。ヱれ感謝のさゝげものを汝ゐさゝげん　十三　汝ヱがたましひを死よりすくひたまへバなり。なんぢ我
をたふさじとヱゞ足をまもり生命の光のうちゐて神のまへに我をあゆませ給ひしにあらずや

## 第五十七篇

ダビデゞ洞にいりてサウルの手をのゾれしとき詠て「ほろぼすなかれ」と
いふ調にあむせて伶長にうたはしめたるミクタムのうた

イ　詩五十七〇一
ロ　詩五十七〇三
ハ　詩五十六〇十一
ニ　詩百十八〇六、箴卅一〇三　來十三〇六
ホ　詩一十九〇三、百四十〇二
ヘ　詩七十一〇十
ト　歴三〇十八
チ　歴八〇卅一
リ　詩五十六〇四
ヌ　詩百十六〇八
ル　伯卅三〇卅

イ 詩五十六〇一
ロ 箴廿六〇廿
ハ 詩十七〇八、六十三〇七
ニ 詩百卅八〇八
ホ 詩百四十四〇五、七
ヘ 詩五十六〇一
ト 詩四十〇十一、四十三〇
三、六十一〇七
チ 箴卅〇十四
リ 詩五十五〇廿一、六十四〇
ヌ 詩五十七〇十一、百八〇五
三
ル 詩七〇十五、十六、九〇十
五
ヲ 詩百八〇一
ワ 詩十六〇九、卅〇十二、百
八〇一二
カ 詩百八〇三
ヨ 詩卅六〇　五、七十一〇十
九、百三〇七十一、百八〇四
タ 詩五十七〇五

イ 詩九十四〇廿　箴十〇一
ロ 詩卅六〇　五、七十一〇十
八、百三〇七十一、百八〇四
ハ 詩百四十〇三　傳十〇十一
ニ 耶八〇十七
ホ 伯四〇十　詩三〇七

一 我をあむれみたまへ神よヱれをあむれみたまへ、ヱゞの靈魂いなんぢを避所とす、ヱれ禍害のすぎざるまでいなんぢの翼のかげを避所とせん　二 我いいたとたかき神によばゝん、ヱがためゐ百事をなしをへたまふ神によばゝん　三 神いたすけを天よりおくりて我をのまんとする者のうしるときに我を救ひたまはん　セ 神いろの憐憫ろの眞實をおくりたまへん　四 ヱがたましひい群ゐる獅のなかゐあり、火のごとくもゆる者ろの齒い戈のごとく矢のごとくろの舌いとき劍のごとき人の子のなかに我ふしぬ　五 神よねゞはくいみづからを天よりも高くしみさかえを全地のうへに擧たまへ　六 かれらいヱゞの足をとらへんとて網をまうく、ヱが靈魂いうなたる、かれらいヱゞまへに阱をほりたり而してみづからろの中ゐおちいれり、セラ　七 ヱが心さだまれり神よヱゞのこゝろ定まれり、われ謳ひまつらん頌まつらん　八 ヱが榮よさめよ、箏よ琴よさめよ、ヱれ黎明をよびさまさん　九 主よわれもろ〳〵の民のなかにてなんぢに感謝し、もろ〳〵の國のなかにて汝をほめうたゝん　十 ろい汝のあむれみい大にして天にまでいたり、なんぢの眞實い雲にまでいたる　十一 神よねゞむくい自からを天よりも高くし光榮をあまねく地のうへに擧たまへ

第五十八篇　ダビデがよみて「ほろぼすなかれ」といふ調にあむせて伶長にうたむしめたるミクタムのうた

一 なんぢら默しゐて義をのべうるか、人の子よなんぢらなほき審判をおこなふや　二 否なんぢらい心のうちに惡事をおこなひ、ろの手の强暴をゐの地にはかりいだすなり　三 あしきものい胎をはなる〳〵より背きとほざかり生れいづるより迷ひていつたりをいふ　四 かれらの毒い蛇のごとくのごとし、かれらい蠱術をおこなふものゝ甚たくみにゆじなふろの聲をだにきかざる耳ふさぐ聾ひの蝮のごとし　六 神よかれらの口の



ヘ 詩卅七〇五、詩百十二〇十
ト 伯三〇十六、傳六〇三
チ 箴十〇廿五
リ 詩五十二〇六、六十四〇
十、百七〇四十二
ヌ 詩六十八〇廿三
ル 詩九十二〇十五
ヲ 詩六十七〇四、九十六〇十
三、九十八〇九
イ 詩十八〇四十八
ロ 詩五十六〇六
ハ 母上廿四〇十一
ニ 詩卅五〇廿三、十四〇廿
三
ホ 詩五十九〇十四
ヘ 詩五十七〇四、箴十二〇十
ト 詩十〇十一、十三、六十四
八　五、七十三〇十一、九十
四〇七
チ 母上十九〇十六、詩二〇四

齒牙をうたまへ、ヱホバよ壯獅の牙をぬきくだきたまへ　七 願くいかれらを流れゆく水のごとくに消失しめ、ろの矢をはなつときい折れたるごとくなし給へ　八 また融てきえゆく蝸牛のごとく婦のときおらず產たる日をみぬ嬰のごとくならしめ給へ　九 なんぢらの釜いまだ荆棘の火をうけざるさきに靑をも燃たるをもともに狂風にて吹さりたまはん　十 義者いかきらが讎かへさるゝを見てよろこび、ろの足をあしきものゝ血のおかにてあらはん　十一 かくて人いいふべし、實にたゞしきものに報賞あり實にさばきをほどこしたまふ神いましますなりと

第五十九篇　サウルダビデを殺さんとし人をおくりてろの家をうかゞむしめし時ダビデがよみて「ほろぼすなかれ」といふ調にあむせて伶長にうたはしめたるミクタムの歌

一 わが神よねゞはくい我をわが仇よりたすけいだし、われを高處におきて我にさからひ起立つものより脫かれしめたまへ　二 邪曲をおこなふものより我をたすけいだし血をなゞす人より我をすくひたまへ　三 視よかれらい潛みかくれてわが靈魂をうかゞひ猛者むれつどひて我をせむ、ヱホバよ此いわれに愆あるにあらず、われに罪あるにあらず　四 かれら趨りまとりて過失なきに我をうこなはんとて備をなす、ねゞはくい我をたすくるために目をさまして見たまへ　五 なんぢヱホバ萬軍の神イスラエルの神よ、ねがはくい目をさましてもろ〳〵の國にのゞみたまへ、あしき罪人にあむれみを加へたまふなかれ、セラ　六 かれらい夕にかへりきたり犬のごとくほえて邑をへありく　七 視よかれらい口より惡をはく、ろのくちびるに劍あり、かれらおもへらく誰ありてこの言をきかんやと　八 されどヱホバよ汝いかれらをわらひ、もろ〳〵の國を

リ 詩五十九〇十七、六十二〇
ヌ 詩廿一〇三
ル 詩五十四〇七、九十二〇十一、百十二〇八
ヲ 創四〇十二、十五
ワ 箴十二〇十三、十八〇七
カ 詩七〇九
ヨ 詩八十三〇十八
タ 詩九十九〇六
レ 伯十五〇廿三、詩百九〇十

あざわらひたまはん　九　わが力よ、われ汝をまちのぞまん、神はわがたかき櫓なり　十　憐憫をたまふ神はヌれを迎へたまはん、神はルが仇につきての願望をヲれに見させたまはん　十一　願くはかれらを殺したまふなかれ、ヲゲ民つひに忘れやむせん、主ヲれらの盾よ、大能をもてかれらを散し、また卑したまへ　十二　かれらがくちびるの言いろの口のつみなり、かれらは詛と虚偽とをいひいづるによりてろの傲慢のためにとらへられしめたまへ　十三　怒恚をもてかれらをほろぼしたまへ、再びながらふることなきまでに彼等をほろぼしたまへ、ヤコブのなかに神いましてカ統治めたまふことをかれらに知しめて地の極にまでおよぼしたまへ、セラ　十四　かれらは夕にかへりきたり犬のごとくほえて邑をへありくべし　十五　かれらはゆきまよひて食物をあさり、もし飽ことなくバ終夜とどまれり　十六　されど我はなんぢの大能をうたひ清晨にてゐをあげてなんぢの憐憫をうたひまつらん、なんぢヲごの迫りくるしみたる日にたかき櫓とおり、ヲごの避所とおりたまひたればおり　十七　ヲごぢからよ我はなんぢにむかひて頌辭をうたひまつらん、神はヲごのたかき櫓ヲにあはれみをたまふ神なればなり

## 第六十篇

ダビデナハライムのアラムおよびゾバのアラムとたゝかひをしゴのヨアブかへりゆき鹽谷にてエドム人一萬二千をころしまときの教訓をおさんとてダビデのよみて「證詞の百合花」といふ調にあはせて伶長にうたはしめたるミクタムの歌

一　神よなんぢヲきらを棄ヲきらをちらし給へり、なんぢは憤りたまへり、ねがはくは再びヲれらを歸したまへ　二　なんぢ國をふるはせてこきを裂たまへり、ねがはくはろの多くの隙をおぎなひたまへ、ろの國ゆ

イ 詩四十四〇九
ロ 代下七〇十四



ハ 詩七十一〇廿
ニ 詩廿五〇十五、廿二
ホ 詩廿一〇五
ヘ 詩百八〇六
ト 詩八十九〇廿五
チ 創十二〇六
リ 箴十二〇廿七
ヌ 詩十三〇廿七
ル 申廿三〇十七
ヲ 創四十九〇十
ワ 利十八〇二
カ 利下十〇十四
ヨ 利下八〇一
タ 詩四十四〇九、六十〇一、百八〇十一
レ 書七〇十二
ソ 詩百十八〇八、百四十六〇
ツ 民廿四〇十八、代上十九〇十三
ネ 箴六十三〇三
イ 箴十八〇十
ロ 詩廿七〇四
ハ 詩廿七〇八、五十七〇一、九十一〇四
ニ 詩廿一〇四
ホ 詩四十〇十一、箴廿〇廿八

りうごくなり　三　なんぢいろの民にたへがたきことを志めし、人をよろめかする酒をヲれらに飲しめ給へり　四　なんぢ眞理のために擧しめんとて汝をおそるゝものに一つの旗をあたへたまへり、セラ　五　ねがはくは右の手をもて救をほどこしヲれらに答をなして愛しみたまふものに助をえしめたまへ　六　神はろの聖をもていひたまへり、ヲれ甚くよろこびん、ヲれシケムをヲかちスコテの谷をはからん　七　ギレアデはヲれがものマナセはヲごの有なり、エフライムも亦ヲごの首のまもりなり、ユダはヲごの杖　八　モアブはヲごの足盥なり、エドムにはヲれヲごの履をなげんペリシテよヲごの故によりて聲をあげよと　九　たれかヲれを堅固なる邑にすゝましめんや、誰かヲれをみちびきてエドムにゆきたるか　十　神よおんぢはヲれらを棄たまひしにあらずや、神よなんぢはヲれらの軍とともにはいでゆきたまはず　十一　ねがはくは助をヲれにあたへて敵にむかはしめたまへ、人のたすけは空しければなり　十二　ヲれらは神によりて勇しくはたらかん、ヲれらの敵をふみたまふものは神なればなり

## 第六十一篇

琴にあはせて伶長にうたはしめたるダビデのうた

一　あゝ神よねがはくはわが哭聲をきゝたまへ、わが祈にみこゝろをとめたまへ　二　わが心くづほるゝとき地のはてより汝をよばん、なんぢ我をみちびきてわが及びがたきほどの高き磐にのぼらせたまへ　三　なんぢはわが避所われを仇よりのがれしむる堅固なる櫓なればなり　四　われ永遠になんぢの帷幄にすまはん我なんぢの翼の下にのがれん、セラ　五　神よおんぢはわがもろ〳〵の誓願きゝ名をおそるゝものにたまふ嗣業をわれにあたへたまへり　六　なんぢは王の生命をのばし、ろの年を幾代にもいたらせたまん　七　王はとこしへに神のみまへにとどまらん、ねがはくは仁慈と眞實とをろおへて彼をまもりたまへ　八　さらば我とこ

しへに名をほめうたひて日ごとにわがもろ〳〵の誓をつくのひ果さん

## 第六十二篇

エドトンの體にたがひて伶長にうたたしめたるダビデのうた

一 わがたましひ默してたゞ神をまつ、ヱゐのすくひい神よりいづるなり　二 神こそいヱゐが磐ヱゐがすくひなれ、またヱゐが高き櫓にしあれば我いたくい動かされじ　三 なんぢらい何のときまで人におしせまるや、おんぢら相共にかたぶける石垣のごとく搖ぎうごける籬のごとくに人をたふさんとするか　四 かれらい人をたふとき位よりおとさんとのみ謀り、いつむりをよろこび、またろの口にていはひろの心にていのろふ、セラ　五 ヱゐがたましひよ默してたゞ神をまて、ろいわがのゞみい神よりいづ　六 神こそいヱゐが磐ヱゐがすくひおれ、又ヱゐがたかき櫓にしあれば我いうごかされじ　七 ヱゐが救とわが榮とい神にあり、ヱゐがちからの磐ヱゐのさけどころい神にあり　八 民よいかなる時にも神によりたのめ、ろの前におんぢらの心をうゐぎいだせ、神いヱゐれらの避所なり、セラ　九 實にひくき人いむなしくたかき人いいつむりおり、すべてかれらを權衡におかん心上にあがりて虛しきものよりも輕きなり　十 暴虐をもて恃とするなかれ掠奪ふをもてほこるなかれ、富のましくはふる時いこれに心をかくるなかれ　十一 ちからい神にあり神ひとたび之をのたまへり、ヱれ二次これをきけり　十二 あゝ主よあなたれみも亦なんぢにあり、なんぢい人おの〳〵の作にたがひて報をおしたまへばなり

## 第六十三篇

ユダの野にありしときに詠るダビデのうた

一 あゝ神よなんぢいヱゐの神おり、ヱゐを切になんぢをたづねもとむ水おき燥きおとろへたる地にあるごとくヱゐの靈魂いかゝきて汝をのぞみ、わが肉体いなんぢを戀ふたふ　二 曩にも我かくのごとく大權と榮光とを

イ 詩卅三〇廿
ロ 詩六十二〇六
ハ 詩卅七〇廿四
ニ 箴卅〇十三
ホ 詩廿八〇三
ヘ 詩六十二〇十二
ト 耶三〇廿三
チ 伽上一〇十五 詩四十二〇四 哀二〇十九
リ 詩十八〇二 箴四十〇十五、十七 箴三〇四
ヌ 詩卅九〇五、十一
ル 伯卅一〇廿五 詩五十二〇七 路十二〇十五 撒前六〇十七
ヲ 伯卅一〇廿五 詩五十二〇
ワ 箴十九〇一
カ 詩八十六〇十五、百三〇八
イ 伯九〇九
ロ 伯卅四〇十一 箴廿四〇十二 耶卅二〇十九 創七〇廿七、卅三〇廿 太十六〇廿七 撒二〇六 廿七 撒前三〇廿 哀二〇六 廿七 撒前三〇十 哀六〇八 西三〇廿五 撒前一〇十七 腓廿二〇十二
イ 詩四十二〇二、八十四〇 二、百四十三〇六
ロ 伽上四〇廿一、代上十六〇 十一 詩廿七〇四、七十八〇六十一



をみんことをねがひ聖所にありて目をなんぢより離れしめざりき　三 なんぢの仁慈いいのちにも勝れるゆゑにわが口唇いなんぢを讃まつらん　四 斯われいわが生るあひだ汝をいはひ名によりてわが手をあげん　五 われ床にありて汝をおもひいで夜の更るまゝになんぢを深くおもはん時わがたましひい髓と脂とにて饗さるゝごとく飽てことを之、わが口いよろこびの口唇をもてなんぢを讃たゝへん　七 ろいなんぢヱゐの助とおりたまひたれば我なんぢの翼のかげに入てよろこびたのしまん　八 ヱゐのたましひいなんぢを慕追ふ、みぎの手いヱれを支ふるなり　九 然ど之おのたましひを滅さんとて尋ねもとむるものい地のふかきところにゆき　十 又つるぎの刃にヱたされ野犬の獲ところとおるべし　十一 玉かれども王い神をよろこばん、神によりて誓をたつるものいみな誇ることをえん、虛僞をいふものゝ口いふさゞるべければおり

## 第六十四篇

伶長にうたたしめたるダビデのうた

一 神よヱゐのなげくときヱゐの聲をきゝたまへ、ヱゐの生命をまもりて仇のおろれより脱かれしめたまへ　二 ねがはくい汝われをかくして惡をおすものゝ陰かおる謀畧よりまぬかれしめ不義をおこなふものゝ喧嘩よりまぬかれしめ給へ　三 かれらい劍のごとくおのが舌をとき、ろの弓をはり矢をつがへるごとく苦言をはおち　四 隱れたるところにて全者を射んとす俄かにこれを射ておろるゝことなし　五 また彼此にあしき企圖をはげまし共にはかりてひろかに羈をまうく、斯ていふ誰かわれらを見んと　六 かれらいさま〳〵の不義をたづねいだして云われらい懇ろにたづね終れりと、おの〳〵の裏のおもひと心といふかし　七 然いあれど神い矢にてかれらを射たまふべし、かれらい俄かに傷をうけん　八 斯てかれらの舌い其身にさからふがゆゑに遂にかれらい躓かん、これを見るものみな逃れさるべし　九 もろ〳〵の人いおろれん而して神のみ

イ 詩卅一〇廿
ロ 詩卅三〇廿三、百四十六〇 二 詩百四〇卅三、百四十六〇 ホ 詩四十二〇八、百十九〇五 十五、百四十九〇五
ヘ 詩卅六〇八
ト 詩六十一〇四
チ 箴廿五〇五 箴四十五〇廿 リ 申六〇十三 箴四十五〇廿 三、六十五〇十六 番一〇五
イ 詩十二〇三、五十七〇四
ロ 詩五十八〇七 耶九〇三
ハ 箴二〇十一
ニ 詩十〇十一、五十九〇七
ホ 詩七〇十二、十三
ヘ 箴十二〇十三、十八〇七
ト 詩卅一〇十二、五十二〇六
チ 詩四十一〇三 リ 耶五十〇廿八、五十一〇十

ヌ 詩卅二〇十一、五十八〇十、六十八〇三
イ 賽六十六〇廿三　ロ 詩卅八〇八、四十〇十二　ハ 詩五十一〇二、七十九〇九　賽六〇七、柴九〇十四　詩豊一〇七、九
ニ 詩四〇三
ホ 詩卅三〇十二、八十四〇四　ヘ 詩卅六〇八
ト 詩廿二〇廿七
チ 詩九十三〇一
リ 詩八十九〇九、百七〇廿九　太八〇廿六　詩七十六〇十　賽十七〇十二、十三
ヌ 詩七十六〇十
ル 申十一〇十二
ヲ 詩六十八〇九、十、百四〇　十三　耶五〇廿四
ワ 詩四十六〇四
カ 賽五十五〇十二
イ 詩百〇一

わざをのべつたへ、うの作たまへることを考ふべし　義者ハ　ホバをよろこびて之によりたのまん、すべて心のなほきものハ皆ほこることを得ん

## 第六十五篇　伶長にうたはしめたる歌ダビデの讃美なり

一 あゝ神よさんびハシオンにて汝をまつ、人ハみまへにて誓をむたさん　祈をきゝたまふものよ諸人こぞりて汝にきたらん　不義のことば我にかてり、なんぢ我儕のもろ〳〵の愆をきよめたまはん　汝に之らばれ汝にちかづけられて大庭にすまふ者ハさいはひなり、われらハなんぢの家なんぢの宮のきよき處のめぐみにて飽ことをえん　われらが救のかみよ、地と海とのもろ〳〵の極なるきはめて遠ものゝ恃とするなんぢハ公義によりて畏るべきことをもて我儕にこたへたまはん　かみハ大能をむび、うの權力によりてもろ〳〵の山をかたくたゝまめ　海のひゞき狂瀾のひゞき、もろ〳〵の民のかしゞのましきを鎮めたまへり　されば極遠にすめる人々もなんぢのくさ〴〵の豫兆をみておそる、なんぢ朝夕のいづる處をよろこび謳はしめたまふ　なんぢ地にのぞみて漑ゝぎおほいに之をゆたかにしたまへり、神のかはに水みちたり、なんぢ如此ゝなへをなして穀物をかれらにあたへたまへり　なんぢ畎をおほいにうるほし畝をたひらにし白雨にてこれをやはらかにし、うの萌芽るを祝し　また恩惠をもて年の冕弁としたまへり、なんぢの途にハ膏をたゝれり　うの恩滴ハけの牧場をうるほし小山ハみな歡びにかこまる　牧場ハみな羊のむれを衣もろ〳〵の谷ハ穀物におほはれたり、かれらハ皆よろこびてよばゝりまた謳ふ

## 第六十六篇　伶長にうたはしめたる讃美なり歌なり

一 全地よ神にむかひて歡びよばゝれ　うの名の榮光をうたへ、うの頌美をさかえしめよ　かみに告まつ



ロ 詩六十五〇五
ハ 詩十八〇四十四
ニ 詩廿二〇廿七、六十七〇三、百十七〇一
ホ 詩九十六〇一、二
ヘ 詩四十六〇八
ト 出十四〇廿一
チ 詩三〇十四、十六
リ 詩十一〇四
ヌ 詩百廿一〇三
ル 詩十七〇三　賽四十八〇十
ヲ 亞十三〇九　使前一〇六、七
ワ 賽一〇十三
カ 賽五十一〇廿三
ヨ 賽四十三〇二
ダ 詩百〇四、百十六〇十四、十七五十九
レ 傳五〇四
ソ 詩卅四〇十一
ツ 約廿七〇九　箴十五〇廿九、廿八〇九　賽一〇十五　約九〇卅一　雅四〇三
子 詩百十六〇一、二
イ 民六〇廿五　詩四〇六、卅一〇十六、八十〇三、七、十九、百十九〇百廿五

れ、汝のもろ〳〵の功用ハおうるべきかな大なる力によりてなんぢの仇ハおんぢに畏れしたがひ　全地ハおんぢを拜みてうたひ名をほめうたはんと、セラ　來りて神のみ業をみよ、人の子輩にむかひて作たまふことをおうるべきかな　神ハうみをかへて乾ける地となしたまへり、ひと〳〵歩行にて河をわたりきゝうの處にてわれらハ神をよろこべり　神ハうの大能をもてとこしへに統治め、うの目ハ諸國をみたまふ、うむく者みづからを崇むべからず、セラ　もろ〳〵の民よ、われらの神をほめまつれ、神をほめたゝふる聲をきこえしめよ　神ハわれらの靈魂をおごらへしめ、われらの足のうごかさるゝことをゆるしたまはず　神よなんぢハわれらを試みて白銀をねるごとくにわれらを錬たまひたれば　汝われらを網にひきいれ、われらの腰におもき荷をおき　人々をわれらの首のうへに騎こえしめたまひき、われらハ火のなか水のなかをすぎゆけり、されど汝うの中よりわれらをひきいだし豐盛なる處にいたらしめたまへり　われ燔祭をもてなんぢの家にゆかん、迫りくるしみたるときにわゞ口唇のいひいでわゞ口のけべし誓をなんぢに償はん　わゞ肥たるものを燔祭とし牡羊を馨香として汝にさゝげ牡牛と牡山羊とをうなへまつらん、セラ　神をおうるゝ人よ、みな來りてきけ、われ神のわゞたましひのために作たまへることをのべん　われわゞの口をもて神によゞゝり、また舌をもてわゞむ　然るにわゞ心に去れる不義あらば主ハわれにきゝたまふまじ　されどまことに神ハきゝたまへり聖意をわゞいのりの聲にとめたまへり　神ハほむべきかな、わゞの祈をさりぞけず、うの憐憫をわれよりとりのぞきたまはざりき

## 第六十七篇　琴にあはせて伶長にうたはしめたる歌なり讃美なり

一 ねゞむくハ神ハをらをあはれみ、ハをらをさきはひてうの聖顔をわれらのうへに照したまはんことを、